

兵庫県医師会医療支援チーム（第26陣）「宮城県災害支援現地報告」

神戸市東灘区医師会 小屋 裕司

兵庫県医師会が担当エリアで1日に診療する患者数は避難所6カ所で合計20から30人程度となっており、ピーク時の半分にも満たない。重症患者は全くなく、5月前半に救急搬送を要したケースもない。巡回ではなく、固定した救護所では受診患者の3分の1が避難所外からの受診で、石巻中学校の救護所の場合、近くに内科診療所がない、という理由で受診されているケースが多く、これは震災だからそうなった訳ではない。簡単に言えば、救護所は当初の「必要な存在」から、次第に「便利な存在」に変質しつつあると感じた。

石巻エリア全体としては赤十字が避難所状況を把握し、コーディネートしているが、本来の責任者が誰なのか、現場からは良く判らない。災害医療は疾患の発生以前からの生活衛生のケアからスタートしているはずだが、我々が避難所での衛生状態に対する意見を個々の避難所責任者に提言しても、実際に実行される気配は薄く、結局、害虫退治や食料事情、あげくにペットと避難している人たちの衛生管理まで赤十字の全体ミーティングで相談しないといけない状況で、行政の姿はきわめて希薄と言わざるを得ない。石巻赤十字の方々には本当にご苦労様と思います。

現地医師会の状況ですが、こちらには全くなんらの情報提供もなく、救護所から患者紹介がしにくい。個別の診療所ががんばっている情報は患者情報で入ってくるが、現地医師会が組織として活動している気配は残念ながら全く感じられなかった。

総括すると、我々の活動は、個々の患者さんのためにはまだ必要と感じられたが、震災2ヶ月たち、地域全体の復興、自立のためには、どのように関わるべきか岐路に立たされている印象を受けた。

